洪　吟

李洪志

日本語版

苦其心志

圓滿得佛果　吃苦當成樂
勞身不算苦　修心最難過
關關都得闖　處處都是魔
百苦一齊降　看其如何活
吃的世上苦　出世是佛陀

一九七六年十二月十七日

その心志を苦しめる

圓満となって佛果を得る
苦を嘗めるをもって楽とす
身を労するを苦と算せず
心を修するは最も過ぎ難し
関という関は全て闖えるべし
いたる処すべて是れ魔
百の苦一斉に降る
其の如何に活くかを看る
世上の苦に堪え得れば
世を出ずれば是れ佛陀

一九七六年十二月十七日

做人

為名者氣恨終生
為利者六親不識
為情者自尋煩惱
苦相鬥造業一生
不求名悠悠自得
不重利仁義之士
不動情清心寡慾
善修身積德一世

一九八六年七月十三日

人(ひと)を做(な)す

名(めい)を為(と)る者(もの)は、氣恨(こころうら)むこと終生(しゅうせい)
利(り)を為(と)る者(もの)は、六親(ろくしん)を識(し)らず
情(じょう)を為(と)る者(もの)は、自(みずか)ら煩悩(ぼんのう)を尋(たず)ね
苦(くる)しく闘(たたか)い相(あ)って、業(ごう)を造(つく)ること一生(いっしょう)
名(めい)を求(もと)めざれば、悠悠自得(ゆうゆうじとく)
利(り)を重(おも)んぜざるは、仁義之士(じんぎのし)
情(じょう)に動(うご)かざれば、心清(こころきよ)らかに欲寡(よくすく)し
身(み)を善(よ)く修(しゅう)すれば、徳(とく)を積(つ)むこと一世(いっせ)

一九八六年七月十三日

覺者

常人不知我
我在玄中坐
利慾中無我
百年後獨我

一九八七年二月二日

註：在我沒有傳法之前自己獨修時所寫。

覚者（かくしゃ）

常人（じょうじん）、我（われ）を知（し）らず
我（われ）、玄中（げんちゅう）に在（あ）りて坐（すわ）る
利慾（りよく）の中（なか）に、我（われ）無（な）く
百年（ひゃくねん）の後（のち）、我独（われひと）り

一九八七年二月二日

注：私が法を伝え始める前、自ら独修していた時に記したもの。

誰敢捨去常人心

常人只想做神仙
玄妙後面有心酸
修心斷慾去執著
迷在難中恨青天

一九八八年八月九日

誰が敢えて常人の心を捨て去るか

常人は只、神仙に做ることを想う
玄妙の後面に、辛酸有り
心を修め、欲を断ち、執着を去る
難の中に迷って、青天を恨む

一九八八年八月九日

願

茫茫天地我看小
浩瀚蒼穹是誰造
乾坤之外更無垠
為了洪願傳大道

一九九零年一月一日

願（がん）

茫茫（ぼうぼう）たる天地（てんち）、我（われ）、小（しょう）と看（み）る
浩瀚（こうかん）たる蒼穹（そうきゅう）、是（こ）れ誰（だれ）が造（な）す
乾坤之外（けんこんのそと）、更（さら）に垠無（はてな）し
洪願（こうがん）の為（ため）に、大道（だいどう）を伝（つた）う

一九九〇年一月一日

無存

生無所求
死不惜留
蕩盡妄念
佛不難修

一九九一年十月二十日

無存（むそん）

生（い）きて求（もと）めるもの無（な）く
死（し）しても惜（お）しまず
妄念（もうねん）を蕩尽（とうじん）すれば
佛修（ほとけしゅう）するは、難（むずか）しからず

一九九一年十月二十日

法輪大法

功修有路心為徑

大法無邊苦作舟

一九九二年七月二十四日

ファールンダーファー
法輪大法

功(こう)を修(おさめ)るに路(みち)有(あ)りて、心(こころ)を徑(みち)と為(な)す

大法(ダーファー)は無辺(むへん)、苦(く)を舟(ふね)と做(な)す

一九九二年七月二十四日

容法

佛光普照

禮義圓明

共同精進

前程光明

一九九二年十二月二十七日

法に溶け込む

佛光は普く照らし

礼儀は圓明となる

共に精進し

前程に光明たり

一九九二年十二月二十七日

乗正法船

真乎玄乎修乎

惚兮恍兮悟兮

一九九三年一月十七日

正法の船に乗る

真か玄か修することや

恍惚たるか朦朧たるか悟ることや

一九九三年一月十七日

無為

三教修煉講無為
用心不當即有為
專行善事還是為
執著心去真無為

一九九三年一月十七日

無為（むい）

三教（さんきょう）の修煉（しゅうれん）、無為（むい）を講（こう）ず
正（ただ）しき心（こころ）であたらざれば、即（すなわ）ち有為（うい）
專（もっぱ）ら善事（ぜんじ）を行（おこな）うも、やはり是（これ）の為（ため）にす
執着心（しゅうちゃくしん）を去（さ）れば、真（しん）の無為（むい）

一九九三年一月十七日

學大法

根基為先天之條件
正悟為上士之慧因
存真善忍心中有道
修法輪大法可圓滿

一九九三年二月十八日

大法を学ぶ（ダーファー　まな）

根基（こんき）を先天（せんてん）の条件（じょうけん）と為（な）し
正悟（しょうご）を上士（じょうし）の慧因（けいいん）と為（な）す
真善忍（しんぜんにん）を存（そん）すれば、心中（しんちゅう）に道有（どうあ）り
法輪大法（ファールンダーファー）を修（しゅう）すれば、圓満（えんまん）す可（べ）し

一九九三年一月十七日

圓明

心懷真善忍
修己利與民
大法不離心
它年定超人

一九九四年二月二十八日

えんめい
圓明

こころ　しんぜんにん　いだ
心に真善忍を懐き
おのれ　しゅう　　たみ　り
己を修し、民に利す
ダーファー　こころ　はな
大法、心を離れざれば
た　ねん　　ちょうじん　　さだ
他年に、超人たるは定まれり

一九九四年二月二十八日

求正法門

功能本小術

大法是根本

一九九四年四月二日

正法の門を求む

功能は本より小術

大法こそ是れ根本

一九九四年四月二日

得法

真修大法
唯此為大
同化大法
它年必成

一九九四年七月七日

法を得る

真に大法を修し
唯此れだけを大と為す
大法に同化し
他年必ずや成る

一九九四年七月七日

緣

大覺心更明
得法世間行
悠悠數千載
緣到法已成

一九九四年八月二十七日

えん
縁

だいかく　こころさら　あき
大覺は心更に明らか
ほう　え　せ けん　い
法を得て世間を行く
ゆうゆう　すうせんねん
悠々たり数千年
えん　いた　ほう　すで　な
縁は到りて法は已に成る

一九九四年八月二十七日

了願

同心來世間
得法已在先
它日飛天去
自在法無邊

一九九四年八月二十七日

了願（りょうがん）

同じ心（おなじこころ）にて、世間（せけん）に来（く）る
法（ほう）を得（え）て、已（すで）に先（さき）に在（あ）り
他日（たじつ）、天（てん）を飛（と）んで去（さ）る
自在（じざい）にして、法（ほう）は無辺（むへん）

一九九四年八月二十七日

助法

發心度眾生
助師世間行
協吾轉法輪
法成天地行

一九九四年八月二十八日

助法（じょほう）

衆生（しゅじょう）を済度（さいど）せんと心願（しんがん）を発（はっ）し
師（し）を手伝（てつだ）って世間（せけん）を行（い）く
吾（わ）れ法輪（ファールン）を転（てん）ずるに協力（きょうりょく）し
法成（ほうな）って天地（てんち）を行（い）く

一九九四年八月二十七日

因果

非是修行路上苦
生生世世業力阻
横心消業修心性
永得人身是佛祖

一九九四年九月十五日

因果（いんが）

修行（しゅぎょう）の路（みち）は苦（く）に非（あら）ず
生々世々（しょうじょうせぜ）の業力（ごうりき）が阻（はば）む
思（おも）い切（き）って業（ごう）を消（け）し、心性（しんせい）を修（おさ）め
永遠（えいえん）の人身（じんしん）を得（え）て、是（こ）れ佛祖（ぶっそ）

一九九四年八月二十七日

迷中修

常人難知修煉苦
爭爭鬥鬥當作福
修得執著無一漏
苦去甘來是真福

一九九四年九月十五日

迷いの中で修める

常人は知り難し、修煉の苦
争いや闘いを福と做す
執著を一つも漏らすこと無く、修めれば
苦去りて甘来たる、是れ真の福なり

一九九四年九月十五日

實修

學法得法

比學比修

事事對照

做到是修

一九九四年十月七日

実修（じっしゅう）

法（ほう）を学（まな）びて、法（ほう）を得（え）る

比（ひ）して学（まな）び、比（ひ）して修（しゅう）す

事々対照（ことごとたいしょう）し

做（な）すところ到（いた）るは是（こ）れ修（しゅう）なり

一九九四年十月七日

佛法圓容

廣傳大法

度人出五行

恒心修煉

圓滿超三界

一九九四年十月十五日

佛法は圓容

広く大法を伝え

人を済度して五行を出る

恒心にして修煉し

圓満し三界を超える

一九九四年十月十五日

再度

法輪常轉度眾生
學法得法修心性
末法之時輪再轉
有緣之士心法明

一九九四年十二月二十七日

再び済度（ふたたびさいど）

法輪（ファーリン）は常（つね）に回転（かいてん）し、衆生（しゅじょう）を済度（さいど）す
法（ほう）を学（まな）び、法（ほう）を得（え）、心性（しんせい）を修（おさ）め
末法（まっぽう）の時（とき）、輪（りん）は再（ふたた）び回転（かいてん）する
縁有（えんあ）る士（し）、心法明（しんぽうあき）らか

一九九四年十二月二十七日

真修

心存真善忍
法輪大法成
時時修心性
圓滿妙無窮

一九九四年十二月二十七日

真修（しんしゅう）

心（こころ）に真善忍（しんぜんにん）在（あ）れば
法輪大法（ファールンダーファー）を成就（じょうじゅ）す
常（つね）に心性（しんせい）を修（おさ）めれば
圓滿（えんまん）して妙（みょう）なること窮（きわ）まり無（な）し

一九九四年十二月二十七日

同化圓滿

乾坤茫茫
一輪金光
覺者下世
天地同向
宇宙朗朗
同化法光
圓滿飛升
同回天堂

一九九四年十二月三十一日

同化(どうか)して圓滿(えんまん)する

乾坤(けんこん)は茫茫(ぼうぼう)とし
一輪(いちりん)の金光(こんこう)あり
覚者(かくしゃ)世(よ)に下(くだ)り
天地(てんち)は同向(どうこう)す
宇宙(うちゅう)は朗朗(ろうろう)として
法(ほう)の光(ひかり)に同化(どうか)す
圓滿(えんまん)して飛昇(ひしょう)し
共(とも)に天堂(てんどう)に回(かえ)る

一九九四年十二月三十一日

大法破迷

悠悠萬事過眼煙雲
迷住常人心
茫茫天地為何而生
難倒眾生智

一九九五年一月二十七日

大法は迷いを破る（ダーファー まよ やぶ）

悠々（ゆうゆう）たる万事（ばんじ）は眼（め）を過（す）ぐ煙雲（えんうん）
常人（じょうじん）の心（こころ）を迷（まよ）はせてしまう
茫々（ぼうぼう）たる天地（てんち）は何（なん）の為（ため）に生（しょう）ず
衆生（しゅじょう）の智（ち）では答（こた）え難（がた）し

一九九五年一月二十七日

跳出三界

不記常人苦樂
乃修煉者
不執於世間得失
羅漢也

一九九五年五月

三界を跳び出る

常人の苦楽を気にせざれば
乃ち修煉者
世間の得失に執せざれば
羅漢なり

一九九五年五月

遊懸空寺

百丈山崖寺中懸
洪傳大法難得閒
今生重遊古崖寺
它日法正萬寺傳

一九九五年六月十一日

懸空寺に訪れる

百丈の山崖、寺の中に懸る
大法を洪伝して、閒を得ること難し
今生再び、古崖の寺に訪れ
他日法正されて、萬の寺に傳わる

一九九五年六月十一日

遊恒山

山恒雲嶺道何在
古觀悠悠遊客來
常人不知玄中妙
利用古廟發黑財

一九九五年六月十一日

恒山に訪れる

山恒にして雲の嶺、道は何処に在る
古觀悠々として、遊客来る
常 人は、玄中の妙を知らず
古廟を利用して、黒き財を發す

一九九五年六月十一日

分明

佛來世中行
常人迷不醒
毒者甚害佛
善惡已分明

一九九五年七月二十六日

分かたれて明らか

佛 来たりて、世中を行き
常 人は迷いて醒めず
毒者は甚しく佛を害す
善悪は已に分かたれて明らか

一九九五年七月二十六日

遊南華寺

佛門淨地難清靜
魔道邪心亂世行
越是名勝魔越多
人雜叫賣鞭炮鳴

一九九五年八月十五日

南華寺に訪れる

佛門の浄地、清静たり難し
魔道、邪心は乱世を行く
名勝であらばあるほど魔多し
人混雑して叫び売り、鞭炮が鳴る

一九九五年八月十五日

自修

大法洪揚
幾人能得
世間繁事重重
百忙之閒可自修
它日煙雲一過
方知真道已得

一九九五年十月六日

自ら修める

大法、弘揚して
幾人が得られるか
世間繁き事、重々
百忙の間、自ら修す可し
他日、煙雲が過ぎ去れば
真の道を己に得たことを、初めて知る

一九九五年十月六日

靜觀

靜修閒來看神仙
各顯神通千百年
人心魔變世不同
眾神不度待劫完

一九九五年十月十六日

静観

静修の間に、神仙を看る
各れ神通を顯すこと、千百年
人心が魔と変わり、世は同じからず
衆 神は済度しようとせず、
劫の終わるを待つ

一九九五年十月十六日

洪

蒼穹無限遠
移念到眼前
乾坤無限大
法輪天地旋

一九九五年十一月九日

洪（こう）

蒼窮（そうきゅう）は無限（むげん）に遠（とお）く
念（ねん）を移（うつ）せば眼前（がんぜん）に到（いた）る
乾坤（けんこん）は無限（むげん）に大（おお）きく
法輪（ファールン）は天地（てんち）に旋（まわ）る

一九九五年十一月九日

主掌天地

天之大天上有天
同有日月層層滿蒼宇
地之廣有天有地
共生萬物芸芸遍乾坤

一九九五年十一月十日

天地を主宰す

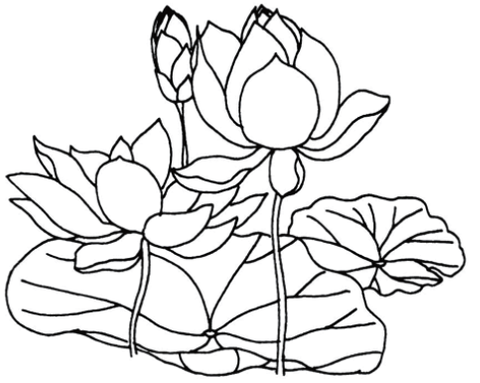
天の大なること、天上に天有り
同じく日月有りて、層々として蒼宇に満つ
地の広きこと、天有りて地有り
共生する万物、芸々として乾坤に遍す

一九九五年十一月十日

人覺之分

何為人　情慾滿身
何為神　人心無存
何為佛　善德巨在
何為道　清靜真人

一九九五年十一月十日



人と覚者の分別

人とは何か、情慾身に満つ
神とは何か、人心存する無し
佛とは何か、善徳巨きく在り
道とは何か、清靜として真人

一九九五年十一月十日

人妖之間

狐黃白柳亂世間
烏煙瘴氣跳大仙
無師無修稱大師
癲癲狂狂二十年

一九九五年十一月十一日

人と妖怪との間

狐、鼬、鬼、蛇、世間を乱し
黒煙瘴気立ちこみて、妖術を施す
師無く修せずに、大師を称し
癲々狂々として、二十年

一九九五年十一月十一日

高處不勝寒

操盡人間事
勞心天上苦
有言訴於誰
更寒在高處

一九九五年十一月十一日

高き処寒さに堪えず

人間の事に、気遣い盡し
天上の苦に、心を労す
言有りて、誰に訴るのか
更に寒しは、高処に在り

一九九五年十一月十一日

大覺

歷盡萬般苦
兩腳踏千魔
立掌乾坤震
横空立巨佛

一九九五年十一月十二日

大覚（だいかく）

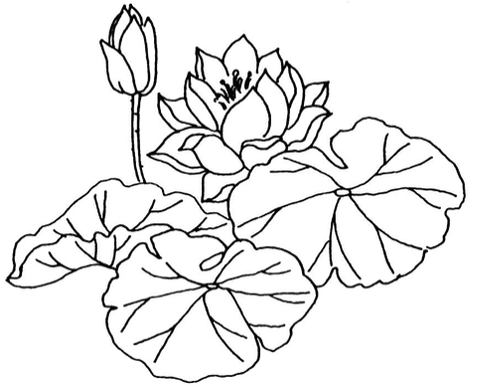
万般（まんぱん）の苦（く）を歴尽（なめつ）くし
両脚（りょうきゃく）は千魔（せんま）を踏（ふ）む
掌（しょう）を立（た）てれば、乾坤震（けんこんふる）い
空（そら）を横（ふさ）いで立（た）つ、巨（おお）きな仏（ほとけ）

一九九五年十一月十二日

打工與修佛

佛教傳戒二千五
名利先去再修苦
今日和尚發工資
上班還有工作服

一九九五年十二月二十五日



仕事と佛を修す

佛教、戒を伝えること二千五百年
名利を先ず去りて、再び苦を修す
今日の和尚は、給料をもらい
出勤すに、また作業服有り

一九九五年十二月二十五日

劫後

絕微絕洪敗物平
洪微十方看蒼穹
天清體透乾坤正
兆劫已過宙宇明

一九九六年一月二日

劫難の後

絶微にも絶洪にも、腐敗した物平らぎ
洪微の十方より、蒼穹を看る
天体は清く透きとおり、乾坤を正し
無限の劫已に過ぎ、宇宙明るし

一九九六年一月二日

迷

芸芸衆生満蒼宇
層層有天皆有地
奇景妙無窮
世人迷不醒
想見談何易
修行如蹬梯
破迷在高處
壯觀妙難訴

一九九六年一月三日

迷い（まよい）

芸芸（げいげい）たる衆生（しゅじょう）、蒼宇（そうう）に満（み）つ
層層（そうそう）に全（すべ）て、天有（てんあ）りて地有（ちあ）り
奇妙（きみょう）なること無窮（むきゅう）
世人（せじん）は迷（まよ）いて醒（さ）めず
見（み）んとするが、容易（ようい）にあらず
修行（しゅぎょう）は、梯（はしご）を登（のぼ）るが如（ごと）し
迷（まよ）いを破（やぶ）るは、高処（こうしょ）に在（あ）り
壮観（そうかん）にして妙（みょう）なること、訴（うった）え難（がた）し

一九九六年一月三日

魔變

天象大變
世人無善念
人心失控魔性顯
天災人禍憂怨
人人相見如敵
事事都難如意
世人怎知何故
修道者可知迷

一九九六年一月四日

魔に変る

天象大きく変り
世人は善念無し
人心の控るを失い、魔性顕れる
天災、人禍、憂い、怨み
人々、敵の如く相見え
事々、全て意の如くなり難し
世人、その故をいかでか知らん
修道する者はその謎を知る可し

一九九六年一月四日

道中

心不在焉
與世無爭
視而不見
不迷不惑
聽而不聞
難亂其心
食而不味
口斷執著
做而不求
常居道中
靜而不思
玄妙可見

一九九六年一月四日

どうちゅう 道中

こころあら
心 在らざれば
よ あらそ な
世と争うこと無し
み み
視ても見ざれば
まよ まど
迷わず惑わず
き き
聴いても聞かざれば
そ こころみだ がた
其の心乱れ難し
しょく あじ
食しても味わざれば
くち しゅうちゃく た
口その執着を断つ
な もと
做して求めざれば
つね どうちゅう い
常に道中に居る
せい おも
静にして思わざれば
げんみょう み べ
玄妙を見る可し

一九九六年一月四日

威德

大法不離身
心存真善忍
世間大羅漢
神鬼懼十分

一九九六年一月六日

威徳（いとく）

大法（ダーファー）、身（み）を離（はな）れずして
心（こころ）に真善忍（しんぜんにん）、存（そん）す
世間（せけん）の大羅漢（だいらかん）
神鬼（しんき）、十分懼（じゅうぶんおそ）れる

一九九六年一月六日

佛主

誰知天地大
銀河在脚下
乾坤有多遠
轉輪手中拿

一九九六年一月六日

佛主（ぶっしゅ）

誰か天地の大なるを知る
銀河は脚下に在り
乾坤はどれほど遠し
転輪は手の中に持つ

一九九六年一月六日

法輪世界

美妙窮盡語難訴
光彩萬千耀雙目
佛國聖地福壽全
法輪世界在高處

一九九六年一月二十三日

ファールン せかい 法 輪世界

美妙(びみょう)なること、語(ご)を窮(きわ)め尽(つ)くしても述(の)べ難(がた)し
光彩万千(こうさいまんせん)、双目(そうもく)に耀(かがや)く
佛国聖地(ぶつこくせいち)は福寿揃(ふくじゅそろ)い
法 輪世界(ファールン せかい)は高処(こうしょ)に在(あ)り

一九九六年一月二十三日

緣歸聖果

尋師幾多年
一朝親得見
得法往回修
圓滿隨師還

一九九六年一月二十三日

縁は聖果に帰す

師を探して、幾多の年
ある日やっと、自ら見るを得る
法を得て、修して引き返り
圓満し、師に随いて還る

一九九六年一月二十三日

遊響堂山寺

日月輪流轉
乾坤是轉輪
拈指二百年
響堂舊無存

一九九六年三月六日

響堂山寺に訪れる

日月は代るがわる転り
乾坤は是れ転輪
指を弾く間に二百年
響堂の旧きは存する無し

一九九六年三月六日

登泰山

攀上高階千尺路
盤回立陡難起步
回首如看修正法
停於半天難得度
恒心舉足萬斤腿
忍苦精進去執著
大法弟子千百萬
功成圓滿在高處

一九九六年四月十五日

泰山に登る

よじ上る高き階、千尺の路
うねりて険しきこと、歩み難し
振り返れば、正法を修するが如し
天半ばに停まれば、得度し難し
恒心をもって足を挙ぐ、万斤の腿
苦を忍び、精進して執着を去る
大法の弟子、千百万
功成って圓満し、高き処に在り

一九九六年四月十五日

圓滿功成

修去名利情
圓滿上蒼穹
慈悲看世界
方從迷中醒

一九九六年四月二十一日

功成って圓滿

名 利情を修し去り
圓滿して蒼穹に上る
慈悲をもって世界を看れば
ようやく迷いの中から醒める

一九九六年四月二十一日

太極

真人蓋世張三豊
大道無敵天地行
後世為名亂拳法
改吾太極壞吾名

一九九六年七月一日

太極（たいきょく）

世（よ）を蓋（おお）う真人（しんじん）、張三豊（ちょうさんぽう）
大道無敵（だいどうむてき）、天地（てんち）を行（い）く
後世（こうせい）、名（な）の為（ため）に拳法（けんぽう）を乱（みだ）し
吾太極（わがたいきょく）を改（あらた）め、吾名（わがな）を壊（こわ）す

一九九六年七月一日

苦度

危難來前駕法船
億萬艱險重重攔
支離破碎載乾坤
一夢萬年終靠岸

一九九六年九月二十三日

苦度（くど）

危難来（きなんきた）れる前（まえ）に、法船（ほうせん）を駕（が）す
億万（おくまん）の艱険（かんけん）を、次（つぎ）から次（つぎ）へ攔（ばば）む
支離破砕（しりはさい）した乾坤（けんこん）を載（の）せ
一夢万年（いちむまんねん）、ようやく岸（きし）の近（ちか）くに着（つ）く

一九九六年九月二十三日

變異

陰陽倒懸
世人心變
鬼獸遍地
人離道遠

一九九六年九月二十六日

変異（へんい）

陰陽（いんよう）は倒懸（とうけん）し
世人（せじん）の心（こころ）は変（かわ）る
鬼獣（おにけもの）は地（ち）に遍（あまね）くして
人（ひと）、道（どう）を離（はな）れること遠（とお）し

一九九六年九月二十六日

廣度眾生

放下常人心
得法即是神
跳出三界外
登天乘佛身

一九九六年十月十六日

衆生を広く済度する

常 人の心を放下して
法を得れば即ち是れ神
三界の外へ跳び出して
佛身に乗って天に登る

一九九六年十月十六日

心明

為師洪法度眾生
四海取經法船蹬
十惡毒世傳大法
轉動法輪乾坤正

一九九六年十月十六日
於亞特蘭大

心明（しんめい）

師（し）と為（な）って法（ほう）を広（ひろ）め、衆生（しゅじょう）を済度（さいど）す
四海（しかい）は経（きょう）を取（と）って、法船（ほうせん）に蹬（のぼ）る
十 悪（じゅうあく）の毒世（どくよ）に、大法（ダーファー）を伝（つた）え
法輪（ファールン）を転動（てんどう）し、乾坤（けんこん）正（ただ）す

一九九六年十月十六日
アトランタにて

難中不亂

正法傳

難上加難

萬魔攔

險中有險

一九九六年十二月二十二日

難の中で乱れず

正法の伝わるは

難しき上に難加わり

万魔が攔ぎ

険しき中に険有り

一九九六年十二月二十二日

末法

世人不仁
神也不神
人間無道
正念何存

一九九六年十二月二十二日

末法（まっぽう）

世（よ）の人（ひと）に仁（じん）なく
神（かみ）も神（かみ）にあらず
人間（にんげん）に道（どう）なく
正念（しょうねん）は何処（どこ）に在（あ）るか

一九九六年十二月二十二日

放下執著

世間人都迷
執著名與利
古人誠而善
心靜福壽齊

一九九六年十二月二十五日

執着を放下する

世間の人はみな迷い
名と利に執着す
古人は誠、而も善
心 静かにして福寿揃う

一九九六年十二月二十五日

有為

建廟拜神事真忙
豈知有為空一場
愚迷妄想西天路
瞎摸夜走撈月亮

一九九七年三月二十八日

有為（ういと読む）

廟を建てて神を拝む事、真に忙しきなり
有為は空なるを知らざり
愚昧に、西天への路を妄想し
手探りで夜を出歩き、月を掬い上ぐことなり

一九九七年三月二十八日

遊岳飛廟

悲壯歷史流水去
浩氣忠魂留世間
千古遺廟酸心處
只有丹心照後人

一九九七年九月十一日於湯陰

岳飛廟に訪れる

悲壮なる歴史は、流水のように去り
浩気忠魂、世間に留まる
千古の遺廟は、心哀しむ処
丹心有りて、後人を照らす

一九九七年九月十一日湯陰にて

訪故里

秋雨綿似淚
涕涕酸心肺
鄉裏無故人
家莊幾度廢
來去八百秋
誰知吾又誰
低頭幾炷香
煙向故人飛
回身心願了
再來度眾歸

一九九七年九月十一日

於岳飛故里

故里を訪れる

秋雨綿綿として涙に似て
涕涕として心肺を酸つ
郷 里に故人無く
家荘は幾度も廃る
八百 秋が過ぎさり
誰か吾、又何者を知るか
頭を低くして幾本かの香をたき
煙は故人に向かって飛ぶ
身を回せて心願了う
再び来りて衆生を済度して帰らんと

一九九七年九月十一日
岳飛の故里にて

遊清東陵

三百歲月似水流
舊殿荒冢滿目秋
誰知今日又來世
它日法正萬古留

一九九七年十月二十六日
於康熙陵

清の東陵に訪れる

三百の歳月、水流に似て
旧殿、荒家に満目の秋
誰か知る今日又も世に来るを
他日法正して万古に留まる

一九九七年十月二十六日
康熙陵にて

善惡已明

眾生魔變災無窮
大法救度亂世中
正邪不分謗天法
十惡之徒等秋風

一九九七年十一月十五日

善悪はすでに明白

衆生は魔と変じ、災い窮り無し
大法は乱れた世で、救い済度す
正邪をわきまえず、天法を謗る
十悪の徒は秋風を待つ

一九九七年十一月十五日

遊日月潭

一潭明湖水
煙霞映幾輝
身在亂世中
難得獨自美

一九九七年十一月十七日

日月潭に訪れる

一潭明湖の水
煙霞幾か輝きて映る
身は乱世の中に在りて
独自の美は得難し

一九九七年十一月十七日

憶長安

秦川山水變
長安土下存
盛世天朝去
轉眼千百春
何處尋太宗
大法度唐人

一九九七年十一月二十二日

長安を憶う

秦川の山水は変じ
長安は土の下に存す
盛世の天朝は去り
瞬く間に千百の春
何処に太宗を尋ねん
大法は唐人を度せり

一九九七年十一月二十二日

安心

緣已結
法在修
多看書
圓滿近

一九九八年一月二十七日

安心（あんしん）

縁（えん）は已（すで）に結（むす）ばれ
法（ほう）を修（しゅう）しており
多（おお）く本（ほん）を読（よ）めば
圓満近（えんまんちか）し

一九九八年一月二十七日

回首

悠悠萬古事
造就迷中人
誰言智慧大
情中舞乾坤

一九九八年二月十九日

振り返る

悠々たり万古の事
迷の中の人を造就る
誰か言う智慧大なりと
情の中に乾坤を舞う

一九九八年二月十九日

世界十惡

人無善念　人人為敵
破壞傳統　文化頹廢
同性慾亂　心暗魔變
興賭興毒　隨心所欲
開放性亂　導向邪惡
黑幫亂黨　政匪一家
自主亂民　逆天叛道
迷信科學　變異人類
吹崇暴力　好勇鬥狠
宗教邪變　錢客政客

一九九八年七月七日

世界の十悪

人に善念無く　人々敵と為す
伝統を破壊し　文化は頽廃す
同性の欲に乱れ　心暗く魔と変る
賭も毒も盛んになり　心のままに振る舞う
性の乱れを開放し　邪悪へ向かわせる
やくざ、悪党　政商は一家となる
自主の乱民　天に逆らい道に叛く
科学を迷信し　人類は変異す
暴力を吹崇し　勇を好み兇暴を闘う
宗教は邪と変じ　銭客、政客なり

一九九八年七月七日

遊雁門關

踏上雁門關
隱隱胸內翻
千年古道在
關中無故煙
延昭揮馬去
風雲逝一千
舉目望關下
大法在中原

一九九八年八月十日於雁門關

雁門関(がんもんかん)に訪(おとず)れる

雁門関(がんもんかん)を踏(あゆ)めば
隠隠(いんいん)として胸(むね)の内(うち)に翻(ひるがえ)る
千年(せんねん)の古(ふる)き道在(みちあ)りて
関中(かんちゅう)に故煙(こえん)なし
延昭(えんしょう)、馬(うま)に乗(の)りて去(さ)り
風雲逝(ふううんゆ)くこと一千(いっせん)
目(め)を挙(あ)げて関(せき)の下(した)を望(のぞ)めば
大法(ダーファー)は中原(ちゅうげん)に在(あ)り

一九九八年八月十日雁門関(がんもんかん)にて

同化

經修其心
功煉其身
它日圓滿
真善忍存

一九九二年十一月十八日
一九九八年八月修改

同化（どうか）

経（きょう）、其（そ）の心（こころ）を修（しゅう）し
功（こう）、其（そ）の身（み）を煉（れん）す
他日圓滿（たじつえんまん）して
真善忍存（しんぜんにんそん）す

一九九二年十一月十八日
一九九八年八月改訂

新生

正法傳
萬魔攔
度眾生
觀念轉
敗物滅
光明顯

一九九八年九月七日

新生（しんせい）

正法伝わりて（しょうぼうつた）
万魔攔ぐ（ばんまさまた）
衆生を済度し（しゅじょうさいど）
観念転ず（かんねんてん）
腐敗物は滅され（ふはいぶつめっ）
光明が顕れる（こうみょうあらわ）

一九九八年九月七日

笑

我笑　眾生覺悟

我笑　大法開傳

我笑　渡船起航

我笑　眾生有望

一九九八年十一月十六日

笑う（わら）

私（わたし）は笑（わら）う　衆生（しゅじょう）の覚悟（かくご）を

私（わたし）は笑（わら）う　大法（ダーファー）が伝（つた）わり始（はじ）めるを

私（わたし）は笑（わら）う　渡船（とせん）の出航（しゅっこう）を

私（わたし）は笑（わら）う　衆生（しゅじょう）の有望（ゆうぼう）なるを

一九九八年十一月十六日